

九州朝陽会報

平成二四年三月一日発行第十七号

普天間基地の辺野古への

移設は愚の骨頂！

株式会社中陽 相談役

豊田 信夫(新?回)

- 1 -

野田政権にとって二〇一二年の最大の外交課題となるのが、沖縄の米軍普天間基地の移設問題である。一九九六年四月米軍普天間基地の全面返還が、日米で合意されたことに基ずいて、一九九九年十二月当時の自民政権は名護市辺野古を移設先に決定。これを受けて日米両政府は、二〇〇六年五月に辺野古沖に2本の滑走路をV字型に建設する案で合意した。

沖縄の人々は二十七年間の米国占領時代、一九七二年の本土復帰後も含めて六十六年間に亘って広大な米軍基地による騒音や健康障害、米兵による犯罪など諸々の苦難の共存を強いられてきた。二〇〇九年自民党長期政権に取って替わった民主党鳩山政権は合意の見直しを表明し、普天間飛行場の移設先として、「国外、最低でも県外」と沖縄県民に約束してきた。にも

拘らず鳩山政権はこの問題に迷走の末、沖縄県民の意思を無視して頭ごなしに辺野古への移設を米側と合意した。二〇一一年末、オバマ大統領と会見した野田首相は普天間基地移設計画の進展を対米公約としてオバマ大統領に直接伝えた。知事はじめ沖縄県民が認めない辺野古への移設を政府はどう処理するのか我々国民は固唾をのんで見守っている。



辺野古の海 (Google からの画像)

『辺野古の海を埋め立てることは自然への冒瀆である』と言っていた鳩山首相の豹変ぶりには啞然とせざるを得ないが、鳩山政権当時の小沢幹事長からも『辺野古のあんな美しい海を埋め立てていいのか?』という発言もあった。首相、幹事長と当時の民主党の両巨頭が辺野古に対してそのような想いを

抱いていたなら、何故もっと早い時期に米国側とその想いをぶつけて膝詰め話し合わなかったのか、そのような形跡は微塵もない。テレビで見る太陽に照らされた透き通るような美しい海、それが名護市辺野古の海だ。こんな素晴らしい自然環境の辺野古の美しい海を埋め立てて滑走路を造ったのでは、生態系への悪影響は勿論のこと悔いを後世に残すことになる。

地球温暖化による異常気象によって、普通でも自然環境が破壊されているのに、人間が敢えて膨大な費用をかけて自然環境破壊に加担するなんて愚の骨頂である。これに類する卑近な例はいくらでもある。国営諫早湾干拓事業の潮受堤防排水門開門問題がそうだ。

二〇一〇年十二月福岡高裁判決で開門が決まった。今開門に反対する長崎県と開門を願う佐賀県が猛烈に争っている。どちらにも軍配が挙げられないこんな悲劇は、元はと言えば生態系への重大な悪影響が想定できるのに国が膨大な費用を使って自然環境を破壊したからだ。福岡市の人工島(アイランドシティ)も自然環境破壊の実例だ。膨大な血税を使って造成したが土地分譲も企業誘致もままならず、不便さを嘆く多くの福岡市民

の反対を押し切って子供病院を移転させようとしている。自然環境破壊は必ずや何らかの歪みが生ずるものである。

日本は今や数百年に一度の大国難に遭遇している。大震災からの復興と原発事故の収束が、緊急且つ最優先の課題であることは世界が知っている。膨大な費用のかかる辺野古での滑走路建設は大災害からの復興優先と言う観点から出来ないと断言すること、辺野古の素晴らしい自然環境は破壊できないんだと言うことを、日本政府は率直に堂々と米国側と仕切りなおすべきではないか。米国側も「日本が最も緊密な大切な同盟国」と言うなら分かってくれないはずがないと思う。国は強硬手段を持っているので、オバマ政権の圧力を受けた日本政府が沖縄県民の意思を踏みにじってまでして強制着工に踏み切ることだけは避けてもらいたい。

(2012.1.12寄稿)

二。一師走の街歩き

小山 春美(新25回)

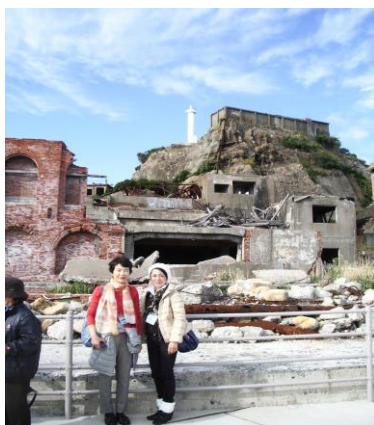
早いもので、福岡を離れて四年半が過ぎた。一年に一度は知己を得た方々と再開したいと思ってい

るが、なかなか思うに任せない。それでも、三度目を九州朝陽会の忘年会にあわせて出かけることができ、楽しい二泊三日を過ごした。

忘年会の翌日(十二月一日)に、七年前の秋に初めて訪れた長崎に行き、稲佐山からの夜景を見てしようと計画していた。思いがけず幹事会の山下さんが一緒にしてくださることになり、さらに胸躍る大人の遠足となった。

復元が進んだ出島では、ボランティアのガイドの方の説明が興味深く、昼食を摂る暇もないまま「九州・山口の近代産業遺産群」のひとつに申請中の軍艦島に向かう小さな遊覧船に乗り込んだ。島に寄せる波の具合で、到着するまで上陸できるかわからないそうだが、幸い上陸でき廃墟となった海底炭鉱の業務に従事した人々の生活の場を見学した。周囲一二〇〇メートルほどのコンクリートの塊のよな島に、当時としては高層の鉄筋アパート群、約五〇〇人の子供たちが通う小中学校、病院、地下には商業施設、娯楽施設があり、はては宗派共通のお寺まであり、すべての用が島の中で足りたそうである。給与水準は高く、テレビは昭和三十年代初めの出始めのころに各戸に設置され、島外から来る電器店はここで大繁盛だったと

か。しかし高層アパートは日本海側からの防波堤の役割でもあり、台風シーズンなどは生きた心地ではなかったそうである。アパートの中には石炭を運び出すベルトコンベアが通り、一日中騒音の中で暮らすような大変な環境だったとのことである。一九七四年に閉山になり、八十三年の歴史に幕を閉じて無人島となり、今日に至っている。帰路は波の高い日本海側を船酔い寸前で長崎港に戻った。心底からの空腹を名物で満たしたのは午後四時近かった。



軍艦島にて

夜景までの間に訪れた長崎県美術館で、大先輩の松尾画伯が寄贈された作品の数々を観ることができたのは予想外で感激した。寒さに震えながら見た夜景の素晴らしさは言うまでもなく、二〇時二〇分発の特急に夕食の弁当持参で乗り込んだ充実の一日であった。最終日は櫛田神社を起点に、秋に期間限定で行われている博多情

緒めぐりのコースのひとつを友人に案内してもらった。明治通りと国体道路の中ほどの裏通りにある寶照院では、この時期、年に二日間だけ御開帳される室町時代に造られた大黒天を見ることができた。ビルの谷間の見過ごしをしまいそ

漏れ日の中、バラ園には幾種類もの花がまだ美しく目を楽しませてくれた。三々五々の昼食後、帝国ホテル、そして内幸町を経て、愛宕山のNHK放送博物館を見学し、愛宕神社を参拝した。ここは標高26mで都内の最高地点だそうである。とびきり急な階段を避け、こ

名残を惜しみながら戻った東京は、ようやく紅葉の盛りを迎えていた。そんな十二月十日、雲ひとつない晴天の中、新七回の先輩方が年に数回行っている歩く会(七歩会)に参加させていただいた。一昨年の九州朝陽会に参加してくださった折のご縁である。地下鉄半蔵門駅から、国立劇場、お濠沿いの二〇号線を通り、最高裁を横目で見ながら憲政記念館を見学、庭には日本の標高の基準をそこに定めた記念碑があり、明治六年に測量され、24.390mとある。国

途中工事中の道端には、「浅野内匠頭自刃の地」の高札が立っている。増上寺に眠る征夷大将軍も、東京タワーに見下ろされてねむるとは想像しなかっただろう。同窓のありがたさで、途中母校の話や、全日本選手権の浅田真央さんやフィギュアスケートの話題など、初対面とは思えないなごやかさにつつまれ、感謝の一七〇〇歩であった。それにしても歩けば発見の多い東京、日頃さほどでもない距離を、いかにモグラのごとく地下の乗り物に頼っていたのか考えさせられた。

長崎、福岡、東京どの都市も、ついあの地震や津波がここで起きたら街はどうなるのか頭をよぎった。海岸から二キロメートル程度のさほど広くない都内最高点など避難場所になりえるのだろうか。海底炭鉱の採掘も原発も国策であり、「なんて酷策！」という私に、

子供好きの山下さんが、「それに子
苦策です」と言ったのが忘れられ
ない。

関東地方では、除夜の鐘が鳴り
終わるのを待つように新年初揺れ
となる地震があり、今年も気の抜
けない一年になりそうである。大
地の変動は小出しにしていたとき、
それぞれの津々浦々の平穏を願う
のみである。

(2012・1・19寄稿)

あろうことか喜寿の
祝いにガン来る

九州民放テレビ会事務局長

大谷 昭示 (新5回)

昨秋喜寿を前にしてとうとうガ
ンがやってきました。「この歳にな
ってなんで？」驚きでしたし、シ
ョックでした。毎年胃の検査をし
ていてなんともなかったのに、昨
年もいつもの通り気楽な気持ちで
定期健診を受けたのですが、ある
うことか食道と胃にそれぞれ二つ
ずつのガンがみつかってしまいま
した。その後の精密検査で、いず
れも粘膜内にある早期のガンで、
内視鏡での切除が可能という診断
でした。またCTなどの結果、転
移もないとのことでした。食道ガ
ンを先にとったほうがよいという

ことで、十一月二十一日に入院し、
翌二十二日に手術、二十八日に退
院しました。そして、食道のガン
の切除の傷あとの治癒を待って、
一月十一日に再び入院、十二日に
胃のガンの手術をし、十八日退院
しました。内視鏡による手術です
から、身体的な負担が軽く、入院
期間も短く、そういう意味ではラ
ッキーでした。病理検査の結果も
完全に切除できたとのことでした。
要は何と言っても早期発見です。

今回の私の場合、早期発見の早期
ガンでしたから本当に僥倖の一語
に尽きると思います。全てに感謝
です。接した医師、看護師の皆さ
んが「よかったですね」と言って
いました。あらためて生命の大事
さを実感し、寿命とか余命とか考
えさせられました。人生最後の下
り坂を少しでも意義あるように下
りてゆきたいと思っています。

同窓生の皆さん五十歳を過ぎた
ら、胃カメラを毎年受診してくだ
さい。その際、胃だけでなく食道
も見てくださいと必ず付け加えて
ください。ガンは老化の現れです。
日本人は長寿化の影響で、欧米諸
国の傾向と反対に増え続けていま
す。二人に一人がガンに罹り、三
人に一人がガンで死ぬといわれて
います。でもガンに対する対策は
格段に進歩しています。最早不治

の病ではありません。十分に注意
をしていれば、天寿を全うできる
と思います。

(2012・1・20寄稿)

沖繩の基地問題を考える

小泉 純理 (新7回)

確かに鳩山首相は当初すくなく
とも普天間は県外に移設と言って
いた。しかし彼はそう述べる底に
確たる信念を持っていたとは思え
ない。ただ単に日本人として、沖
縄県民だけに基地の負担を負わず
ことに不条理を感じていたに過ぎ
ないのではなからうか。鳩山総理
の日頃の言動を見るにつけ、所詮
彼は何不自由なく裕福な家庭に育
ち、ただ日々安穩に恵まれた生活
を享受し、常識人の持つごく当た
り前の正義感を時には抱き、ふと
した弾みで政治に足を踏み入れた
のだらう。したがって高邁なる国
家感とか政治信条など持ち合わせ
ているとは思えない。そのことを
露呈したのが、この普天間基地問
題への対応である。マスメディア
にでる評論家や政治家たちは、こ
のときとばかりに鳩山政権の無策
を責めるばかりでほとんど具体的
解決策、根本的問題点には言及し
ていない。それよりもこれを機会
に、日米安保体制の必要性、具体

的には抑止力なるものの必然性の
有無、現在の国際情勢あるいはこ
れからのあり様などを根本的に議
論すべきではないだろうか。もし
て沖縄県民には申し訳ないが、早
急にその議論が真剣になされ、国
論がある方向に収れんするまでは
現状の負担を堪忍してもらい、そ
れなりの直接的、間接的支援を沖
縄県民以外の全国民が負担すべき
である。昨今の為政者、殊に戦後
生まれの世代の人は、改めて沖縄
戦で海軍司令官大田実中将が自決
を前にして、最後に送った電文の
重みを忘れてはならない。

まず抑止力なるものを考えてみ
たい。昨今テレビにやたらに顔を
出し、声高に抑止力の必要性を公
言する者は、石波茂とか安部晋三
に代表される右寄りの戦後生まれ
政治家やジャーナリストに多い。
彼らは全く戦争体験が無く、国家
間戦争は劇画かテレビによるイメ
ージで描いているにすぎないとし
か思えない。彼らの言によれば、
日米安保体制、すなわち沖縄の米
軍基地は、これまで中国、北朝鮮
に対して、抑止力として機能し、
そのおかげで日本の安全が保持さ
れてきたと言う。一体現在の国際
情勢のもと、先進国の間で、他国
に何らかの一方的目的やら、外交
交渉の決裂などを理由に攻め込む

などということがあるだろうか。国境を地続きで接する後進国間、あるいは異民族間では、今日でも宗教的、経済的対立から紛争は絶えない。こうした部分的戦争は今後とも発生することは人類の性として残念ながら避けがたい。しかし彼らは我が国と中国、北朝鮮を同じレベルで考えているのだろうか。よしんばこの間で交戦する事態が生じたとしても、彼らは核兵器を保有し、それを瞬時に打ち出す手段も有しているのに、航空機や艦船陸上兵力が機能する余裕があるのだろうか。これだけ核武装が世界各国に広がりつつある現在、過去の世界戦争のような国家間の戦争が起こった時は、その当事国は滅亡の状況にいたることは明らかで、テロリストはともかく先進国の為政者は少なくともその危険は十分認識していると思うし、そう信じたい。中国、北朝鮮といえども例外ではなからう。だからこそ、今日先進国間で核兵器削減論が論議されている。敢えて抑止力が必要というなら、我が国も核武装する以外その効力はなからう。だからと言って核兵器を製造してよいというのではない。それは別の議論である。結局非核三原則を改め、米国の核兵器を我が国に貯留することが、抑止力を機能させ

るための現実的絶対条件とならざるを得ない。

しかし、私は寧ろ戦後半世紀を過ぎた今日、改めて国防の根本たる国民の安全を守るという原点にかえり、憲法を含め外交手段による国家間の安全保障体制を見直し、一方で自らの力で自衛する強力な体制を再構築すべきだ。少なくとも、四面を海に囲まれた我が国の沿岸は、原始力発電所をはじめ、不法密入国、拉致行為などから自衛隊が守るための諸強化を図るべきであろう。米軍の基地は必要最小限とし、これまでそれに要した費用をそれらにおけたらよい。

(2010・12・10寄稿)

忘年会開催記

去る十一月三十日少し早目の忘年会を福岡市内藤崎の四川料理「大明火鍋城」で開催しました。この店は本場四川出身の中国人の経営するもので、その料理のすべてが、和風にアレンジされた中華料理と比べてめっぽう辛くて有名です。その中でも特に人気の火鍋に、その辛さへの忍耐を競いながら、老酒をはじめ乾杯酒として有名なマオタイなど洋様なアルコール飲み放題の三時間があっという間に過ぎた忘年会でした。ひ

とテーブルに二つの鍋を十二人で囲んで、いつものように、東日本大震災、原発問題などなど談論風発、実に楽しい年末のひと時を楽しみました。参加者は石井会長、小代伸博さん、田上三雄さん、豊田信夫さん、寺田順生さん、成瀬輝一さん、野上秀昭さん、佐藤一生さん、それにはるばる東京から小山春美さん、広島から佐治尚雄さん、そして勤務を終えて遅れて参加の山下美智恵さん、そして私の十二名でした。今回は春に九州新幹線も鹿児島まで開業し利便さも増したので、帰路の便宜を考えて開始時間を早めました。その方面の参加者が無かったのは残念でした。今後ともこうした催しには、遠方の会員が参加しやすいように配慮する所存ですので、皆さんの参加を期待しています。

幹事長記

事務局からのお知らせ

・会員動静、bx
住所変更

佐藤一生(新16回)

〒874-0901

別府市中島町十七番二十三号

電話 0977-21-4444

携帯 080-8354-1940

・年会費納入のお願い

今年度会費は2月末日現在8名の方が未納です。未納の方には**振込取扱票**を同封します。

編集後記

平成十二年も早いものでもう一ヶ月が過ぎました。多難な昨年の後遺症ともいうべき被災地復旧、原発事故後処理、避難者補償問題などまだまだこれからでしょう。未曾有の震災に忘れ去られたような沖繩の基地移転問題、豊田さんの提言を機会に、折しもテレビでドラマ化された「運命の人」も参考に、あらためて我々は真剣に考えてみたいものです。その意味で、拙文は十四号会報に掲載すべく寄稿したもので、当時紙面が足りず没にしていたのですが、今号紙面を埋めるために要約して掲載しました。ご容赦ください。次号発行は七月一日です。内容、字数は問いませんので皆さんからの投稿を期待しています。締め切りは五月末日です。

編集者記

【発行元】

九州朝陽会事務局

福津市若木台1丁目
20-7

Tel/Fax:0940-43-5545

Mail:kjun612@nifty.com

【編集者】

九州朝陽会 幹事長

小泉 純理

(新7回)

